莊子の對話の說話について

――莊子と惠子・莊子と弟子を中心に――

水　野　厚　志

東京国際大学論叢　人文・社会学研究　第５号　抜刷
2020 年（令和２年）３月 20 日

莊子の對話の説話について
――莊子と惠子・莊子と弟子を中心に――

水　野　厚　志

The Dialogue Narratives in the *Zhuangzi*: An Examination and Comparison of Zhuangzi and Huizi and Zhuangzi and Zhuangzi's Disciples

MIZUNO, Atsushi

Abstract

The dialogue-type narratives of Zhuangzi and Huizi are often added to the end of a specific chapter, which add a certain gravitas to the Zhuangzi. The analects contain the oldest parts of the *Zhuangzi*, and while many of them are in the "Inner Chapters" and the "Outer Chapters," there are none in the "Mixed Chapters." Because of this, it is evident that the editor placed these analects with a specific intention; some chapters are without analects but with important themes. Therefore, it is necessary to examine all the analects carefully and compare them in order to discern the path of the development of their schools.

Keywords: 莊子（Zhuangzi），惠子（Huizi），語錄，對話，説話

目　次

はじめに
一．對話形式の説話
二．莊子と弟子・莊子と惠子の對話による説話
三．語錄としての莊子と對話を主とした説話の展開
まとめ

はじめに

「先行研究のまとめ」

現行本『莊子』は，郭象の刪定した三十三篇本であるが，その三十三篇の中で，內篇は莊子の自著であり，外篇・雜篇は莊子の弟子や後學の作であり，內篇は成立が最も早いため價値も高く，外篇は成立がやや新しく價値も低くなり，雜篇は成立が最も新しく價値も最も低いと，今日まで一般に考えられてきた。

池田知久の論考によれば，こうした考えは，明代の朱得之『莊子通義』，焦竑『莊子翼』，李贄『續焚書』讀南華あたりから本格的に始まるが，そのきっかけを作ったのは，唐の韓愈・宋の蘇軾である。韓愈は歴史上初めて雜篇の「盜跖」·「說劍」·「漁父」を疑い，蘇軾はこれを受け繼ぎ「讓王」·「盜跖」·「說劍」·「漁父」を疑った。蘇軾の「莊子祠堂記」は「寓言篇」と「列御寇篇」の間の「讓王」·「盜跖」·「說劍」·「漁父」の四篇を削り，「列御寇篇」と合わせて一つにした。それ以來，羅勉道・焦竑·王夫之·方潛など多くの學者がこれに從い，現代に至っても，張恆壽のようにこの方向で「寓言篇」と「列御寇篇」兩篇を關係づける者がいる。

日本でも福永光司『莊子內篇』（朝日新聞社，1966）の解說に見られるようにその傾向は續いている。また，金谷治「『莊子』內篇について」（『日本中國學會報』第五集，1953）では，內篇の三分の二が『莊子』の原初の思想であると述べていることからも學術界の內篇偏重の流れを知ることが出來る。池田が指摘するように，先秦・前漢期では，『荀子』·『呂氏春秋』·『韓非子』が『莊子』から引用した諸篇は全て三十三篇本の外·雜篇にあり，『史記』「莊周列傳」中でも「漁父」·「盜跖」·「胠篋」·「畏累虛」·「亢桑子（庚桑楚）」の外篇・雜篇五篇を擧げている。當時すでに內・外・雜篇の區別があれば，內篇の文章や篇名を擧げずに，韓愈や蘇軾が疑った外・雜篇の文章や篇名だけを擧げることはなかったはずである。[1)]

そして，池田は，『莊子』を初めて現行本の前身である五十二篇本に整理したのは，前漢末期の劉向であったと考えている。劉向は，祕府の內に藏されていた十餘萬言を中心に，外から集めてきた材料を加えて整理し，五十二篇本に編纂したが，その時初めて內篇・外篇・雜篇などの區別を設け，內篇七篇の篇名を着想し，それらの篇名の下に，雜然たる堆積の中から適當な文章を選んで案配した。劉向が內篇を外・雜篇よりも重要と考えていたことは確實だが，それは前漢末の劉向の考えであって，內篇が莊周の自著であることを保證するものではなく，前漢末の思想界や劉向の，莊子像を示す思想史の資料としての意味を持つだけでしかない。從って，內篇・外篇・雜篇に捕らわれることなく，學派の淵源・發生・系統・類別・展開などを體系的總合的に論ずべきであるとする。[2)]

確かに內篇七篇の篇名は，三字から構成される非常に凝ったものであり，編輯者の內篇に對する竝々ならぬ思いを見ることができ，後世編纂者の手を經て現行本『莊子』が成立したことを物語っている。篇名の作者が劉向であったであろう事は，佐藤明が內篇の篇名，「逍遙遊」·「齊物論」·「養生主」·「人間世」·「德充符」·「大宗師」·「應帝王」は，篇の內容を要約した三字からなり，二字の熟語の末尾に一字を加えた形をとっていて一貫性があり，しかも，「德充符」·「大宗師」等と緯書を思わせるような命名の仕方である。これは緯書が流行したころ，前漢末より後漢にかけての時代と關係があるのではないかと考えられるといっていることからも裏付けられる。[3)]

また，『莊子』本文の內容について，文章の構成・文體の面から，原初の形態は語錄であるとする學者も存在する。その主張は管見の限りにおいて，津田左右吉と佐藤明の二名だけである。佐

藤の引用する語錄に關する先行研究は次の通りである。[4)]

津田左右吉は，『道家の思想とその開展』の中で，現在の『莊子』のもとになった原本『莊子』が荀子の時代に存在し，それは『老子』と同じ語錄であったと想像したが，松本雅明は，『中國古代における自然思想の展開（松本雅明博士還曆記念出版會 東京 中央公論事業出版，1973)』の中で批判を加え，津田博士は，原本『莊子』を『老子』と同じ語錄であると想像するが，それについての決定的な論據は存在しない。『莊子』が荀子の時代に語錄として存在し，それがわづかの間に亡佚してしまったといふより，語錄なるものがはじめから存在せず，ために語錄的引用がほとんどみられない，とした方が穩當であろう。すなはち最初から語錄的性格をもたず，空想的說話によって組立てられてゐた，としても支障はないであろうとし，語錄としての原本『莊子』の存在を否定した。一方，武內義雄博士は，「齊物論」·「逍遙遊」·「養生主」·「大宗師」の各篇に莊周の眼目が著されているとし，さらに金谷治博士は，武內博士の考えを發展させ，『莊子』內篇各篇の主要部（內篇全體のほぼ三分の二に當る部分）を『莊子』の原初の思想であると考えている。松本・武內・金谷三人の說に共通するのは，現在の『莊子』內篇には成立の層が見られ，その最も古い部分に莊周の自著（原本『莊子』に當たる）が說話の形で含まれているという點であり，齊物論篇前半部分は，三人が原本『莊子』として共通に認める唯一の部分である。

以上のように，『莊子』が內篇・外篇・雜篇に分けられている以上，そこには編者の思惑があるはずである。また，本文の構成についても，津田左右吉の指摘をないがしろにせず，もう一度原點にたち戻って精查する必要があると思われる。

「問題の所在」

以上に擧げた先行研究に對して，『莊子』の內篇が從來指摘されてきたような，莊子の自著などではなく，尙且つ殘存する外・雜篇が編纂途中で放置されたものであったのならば，果たして莊子學派の淵源について知る手立てはあるのだろうか，という問題を提起したい。

周知のように『莊子』「寓言篇」の中には「寓言十九」とあり，『莊子』書中の九割は寓言を旨とする說話で出來ていることを「寓言」篇が成立した後の莊子學派では認識していたことは明らかである。實際に，『莊子』書中の論說部分を除いた大部分は說話，特に對話を中心とする說話でなり立っている。

また，雜多な說話に對して作者を莊子と見なす考えは，時代を隔てた後世，唐代の陸德明の外・雜篇に對する扱い方からも推測できる。外・雜篇はほとんどの篇が雜多な說話の寄せ集めから構成されていて，實際には書き出しの二語或いは三語を篇名として代用してるだけなのに對し，陸德明は「擧事以名篇（事物によって名付けた篇)」·「以義名篇（內容によって名付けた篇)」·「借物名篇（事物に假託して名付けた篇)」·「擧事以名篇（事物を列擧して名付けた篇)」·「以人名篇（人名によって名付けた篇)」·「以事名篇（事柄によって名付けた篇)」というように注記している。このことからも，陸德明は各篇が莊子によって規則正しく排列されていると錯覺していたことが窺える。[5)]

外·雜篇の中で，內容や事柄によって名付けられている篇は，「庚桑楚」·「讓王」·「盜跖」·「說劍」·「漁父」だけである。そしてこの中でも，「讓王」·「盜跖」·「說劍」·「漁父」の四篇については，「先行研究のまとめ」の中でも触れたように，蘇軾によって削られ，「列御寇篇」と合わせて一つにされた篇である。また，司馬遷の『史記』に，『莊子』の篇名として擧げられているのは，「漁父」·「盜跖」·「胠篋」·「亢桑子（庚桑楚)」であるが，上記のように「胠篋」をのぞく「庚桑楚」·「漁父」·「盜

跖」は，內容や事柄によって名付けられている篇に相當する。以上は，殘存する外･雜篇の篇名が，現行本『莊子』の編輯時にまだ編纂途中であったことを示す證左であることは想像に難くないが，なぜ『史記』でわざわざ上記の篇を取り上げているのか等の問題は，紙幅の關係で本論文では扱えないので，このことは稿を改めて述べていくことにしたい。

『莊子』の思想史的な展開を探ることも重要ではあるが，各篇の中で複雜に入り組んだ展開を見せる說話の中で，どの部分が原初の形態を持っているのかを，分析することも同樣に重要である。テクニカルタームによる分析では，その語句によって年代や思想的背景がある程度特定される。しかし，その語句が含まれている一節しか分析の對象にならない。そして，說話の一部として，後から巧みに語句を織り交ぜて作爲した文章であるとも言い切れない。それに對して，內容や構成による分析では，文章全體を對象とすることができるからである。

また，津田左右吉が指摘するように老子同樣，莊子が烏有先生である可能性も否定できず，莊子が主人公の篇を，原初の形態であるとすることは極めて危險である。[6] それでは，全く手がかりがないかと言うと，弟子等身近な人物との對話を探る手立てが殘されている。莊子と弟子或いは莊子の論敵との關係であれば，プラトンによる『ソクラテスの辯明』ではないが，弟子による師匠や論敵の描寫はその關係が近いほど僞ることが出來ないからである。莊子學派を形成し，假にも莊子を師に頂くグループが存在したことは，戰國末期の諸子の『莊子』の引用，および荀子などの莊子批判によって明らかであるので，少なくとも他學派にとって無視できない規模の思想家集團を形成していたことは確かである。また，莊子の論敵・好敵手といえば，『莊子』の中にもしばしば登場し，「天下篇」にも多くの紙面を割いている名家の惠施（惠子）を擧げることが出來る。弟子として，直接莊子本人ではなくても，莊子學派の一人として師に從事し，テキストの一部を傳えてきた者にとって，思想家集團を代表する莊子の姿は理想であり，特に弟子や惠施との對話の中で，その淵源となる思想は吐露され傳承されていったのではないか。現行の莊子の說話が，たとえ劉向の莊子像を示す思想史の資料としての意味を持つだけであったとしても，『莊子』の編纂過程や學派の淵源や展開などの一端を知る手立てを示すことは出來るのではないか。以上のように考え，莊子が登場する說話を中心に見ていくことにするが，紙幅の關係上，今回は『莊子』書中で最も古い原初の思想を描いていると推測される「莊子と弟子」，「莊子と惠子」の對話を中心に分析していくことにする。

一．對話形式の說話

『莊子』の中に含まれている莊子を主にした說話は全體で三十一箇所に及んでいるが，その中には，「莊子曰」で始まる說話形式でないものは三箇所ある。また，他に「齊物論篇」の「胡蝶の夢」等の數點を除くと，他はすべて莊子と他者との對話の說話であり，以下に示すように二十三箇所に及んでいる。

佐藤明は，『莊子』中の莊子の登場する說話について，一覽したものとして，木村英一『中國哲學の探求」（創文社，1982）所收「莊周說話を通じて見た莊周の死生觀」）があるが，『莊子』の記事を一箇條（小論の五の「天道篇」の記述）缺いており，三十箇條になっていると指摘している。[7] また，『莊子』中の莊周･莊子を扱った記述の中で，「莊子曰」で始まるものが三箇條（「天道篇」･「外物篇」･「列禦寇篇」）あるが，三者に共通する傾向として，記述も平易であり洗練されているものとは思われない。考察の餘地があるが，單に一人の人物がある時代に現れ，後の人がそれを繼承していったという單純なものではなく，文獻の成立の上で幾つもの層があり，最初は意外に素朴

なものが様々の過程を經て次第に洗練されていき，發展していった可能性も考えられると述べている。[8] そして，池田知久は「莊子曰」の表現形式は，問答でなくて現れる例としては，「列禦寇篇」のものを除けば他に「天道篇」に一例があるだけだとする。[9] しかし，こうした「莊子曰」で始まる事例は，記述も平易であり洗練されているものとは思われず，成立年代はいずれも遲く，原初の形態を示しているのかどうかも疑わしい。むしろ「『莊子』の中に含まれている莊子を主にした說話」は，對象が設定されているだけに，莊子の權威付けには缺くことが出來ず，それだけに編纂者の目に留まりやすかったのではないかと思われる。

以下，二十三例について擧げるが，收錄されている篇名の後に，各說話ごとに通し番號・簡潔に記した內容・說話が作られた時代（池田知久による）の順に記してある。また，（　）內の算用數字であるが，對話の相手が同一の場合に限り，通し番號を付している。

【內篇】

「逍遙遊篇」

①莊子と惠子（1）／魏王の大瓢→無用の用／戰國後期～末期の作

②莊子と惠子（2）①②は一續きの文章／役立たずの樗→無用の用／戰國後期～末期の作

「德充符篇」

③莊子と惠子（3）／「人の好惡を以て內に其の身を傷つけず，常に自然に因りて生を益さざるを言ふなり」。／戰國最末期～前漢初期の作

【外篇】

「天運篇」

④莊子と商太宰蕩／「虎狼は，仁なり」。／前漢，文帝～武帝期

「秋水篇」

⑤莊子と楚王／「吾聞く楚に神龜有り･･･寧ろ其れ生きて尾を塗中に曳かんか」。／戰國末期の文章

⑥莊子と惠子（4）／「惠子 梁に相たり。莊子往きて之を見る。或るひと惠子に謂ひて曰く，莊子來たりて，子に代りて相たらんと欲す」。／戰國後期～末期の作

⑦莊子と惠子（5）⑤から⑦は一續きの文章／「莊子惠子と濠梁の上に遊ぶ･･･」。—いわゆる豪梁說話／戰國後期～末期の作

「至樂篇」

⑧莊子と惠子（6）／「莊子の妻死す。惠子 之を弔う。莊子則ち方に箕踞して盆を鼓ちて歌う」。／戰國末期～前漢初期の作

⑨莊子と髑髏 ⑧⑨は一續きの文章／轉化による死生の問題を取り扱う。／戰國末期～前漢初期の作

「山木篇」

⑩莊子と弟子（1）／「周は將に夫の材と不材との閒に處らんとす」。／戰國末期～前漢初期

⑪莊子と魏王／「貧なり，憊れたるに非ざるなり」。／前漢初期

⑫莊子と弟子＝藺且（2）／「莊周 雕陵の樊に遊ぶ。一異鵲南方自り來る者を睹る。･･･莊周曰く，吾形を守りて身を忘れ，濁水に觀て淸淵に迷へり」。／戰國末期～前漢初期

「田子方篇」

⑬ 莊子と魯の哀公／「魯には儒少なし」。儒學の素養もないのに儒服を着ている者が多くいるのは，輕薄な社會現象である。／前漢時代

「知北遊篇」

⑭莊子と東郭子／道の在る所を問う。屎尿にも道はある。／前漢初期

【雑篇】
「徐無鬼篇」
⑮莊子と惠子（7）／「儒・墨・揚・秉・惠」のいずれとも異なる莊子（道家）の思想が，それらに君臨しうるものであることを主張し，その立場から惠子を批判する。／前漢初期に著された司馬談「六家要旨」や『淮南子』要略篇の考えに通じる。
⑯ 莊子と惠子（8）⑮⑯は一續きの文章／莊子が惠子の沒後，言論の好敵手を失ったと嘆く。／前漢初期
「外物篇」
⑰莊子と惠子（9）／「無用を知りて，始めて與に用をいうべし」。「逍遙遊篇」①②とほぼ同じ趣向→無用の用／戰國末期の作
「寓言篇」
⑱莊子と惠子（10）／孔子を外化して內化しない人物として高く評價する。／戰國末期～前漢初期の作
「說劍篇」
⑲ 莊子と趙の文王／趙の惠文王に天子・諸侯・庶人の劍の極意によって政治の在り方を說く。／前漢時代
「列禦寇篇」
⑳莊子と曹商／「宋の曹商，秦王に百臺の車を賜る。治むる所 愈下りて，車を得ること愈 多し」。宋王は，偃王とすれば，在位は前三二八年～前二八六年。本章は，本書の作者莊子の活動年代を推測する資料となっている。／秦帝國崩壞後の成立
㉑莊子と（或）人／「今，宋國の深きは，直に九重の淵に非ざるなり。宋王の猛は，直に驪龍のみに非ざるなり→黑龍頷下」。政治權力の恐ろしきを强調する。／戰國時代
㉒莊子と或（人）／莊子と犧牛は，「衣するに文繡を以てし，食うに芻叔を以てするも，其の牽きて太廟に入るに及びては，孤犢たらんと欲すと雖も其れ得べけんや」。→本章は，「秋水篇」の文と同工異曲。政治的な地位と養生とを對立させて，養生を取る。／戰國時代
㉓莊子と弟子(3)㉑から㉓は一續きの文章／「莊子，將に死せんとす。吾れ天地を以て棺槨と爲し，日月を以て連璧と爲し，星辰を珠璣と爲し萬物を齎送と爲す」。／戰國末期

以上，二十三例の莊子と他者との對話の說話は，內・外・雜篇に渡りバランス良く配置されているものの，「逍遙遊篇」・「秋水篇」・「至樂篇」・「徐無鬼篇」・「列禦寇篇」の中には數話連續して收められている箇所が有る。特に「逍遙遊篇」・「秋水篇」・「列禦寇篇」では，篇末に莊子と他者との對話の說話がまとめて收錄されている。なお，莊子と他者との對話の說話については，池田のいうように，類似の說話が內・外・雜篇に散見する。例えば⑱莊子と惠子（10）の「孔子行年六十而六十化，･･･」については，「則陽篇」に蘧伯玉のこととして既出。孔子を外化して內化せざる人物として高く評價している。[10] また，⑨莊子と髑髏は，主人公は莊子だが，篇末には列子を主人公とした列子と髑髏との對話の說話が置かれ，「至樂篇」の他の對話の說話同樣，死生觀を中心に論を展開する對話の說話で締めくくられている。更に⑰莊子と惠子（9）は，「逍遙遊篇」①②とほぼ同じ趣向で「無用の用を說いたものであり，㉒莊子と或（人）は，政治的な地位を得ることと養生とを對立させて，養生を取る說話であり，「秋水篇」の文章と同工異曲である。[11]

佐藤のいうように，『莊子』中の說話については幾つかの說話群に分類することも可能であるが，それぞれの說話群の間には，傾向の違いが見られ，同一の作者によるものとは考えにくい。さら

に付け加えれば，同一の說話群であってもそれが內篇と外・雜篇とにかかわらず見られ，內篇と外・雜篇との間には說話の質の違いがあっても傾向の違いは見られず，例えば內篇のみを莊周の手になるというように同一人物の手になるということは考えにくい。このように見れば，原本『莊子』が莊周の手になるとして，『莊子』中の說話の一部，あるいは莊周が說話の形で，思想を表現する示唆を何らかの形で示したということは考えられるが，說話の多くの部分を莊周が記したとは考えられない。[12)]

しかし，弟子として直接莊子本人ではなくても，莊子學派の一人として師に從事し，テキストの一部を傳えてきた者にとって，思想家集團を代表する莊子の姿は理想である。特に弟子や惠施との對話の中で，その淵源となる思想は吐露され傳承されていったのではないか。現行の莊子の說話が，たとえ劉向の莊子像を示す思想史の資料としての意味を持つだけの存在であったとしても，『莊子』の編纂過程や學派の淵源や展開などの一端を知る手立てを示すことは出來るのではないか。

また，佐藤は莊子の原本は『老子』と同じ語錄であったと想像したのは津田左右吉であったが，松本雅明に批判されてより默殺されてきた。諸學者が莊子の要諦として認める齊物論の冒頭の說話は，當時の思想界の情況から考察すれば，恐らく當時は筆記の形態も限定され發展段階にあったであろうことから，從來とは全く異なった論理的思考樣式が突然出現したと考えることは，思想史・文化史の發展から見てもありえない。哲學的であり論理的思辯を盡くしたものが作製されることは不可能であり，原本『莊子』と比較して考えるべきは『論語』と『老子』といった廣い意味での語錄であるという。[13)]

さらに佐藤は，「齊物論」の冒頭の說話の前半を說話部，後半を論說部（いわゆる語錄を含む部分）と假定し，本來は別々の說話が合わさって一つの說話を形成しており，しかもそれは松本雅明が原本『莊子』に當るとされた說話の一部に認められるとする。また「齊物論」の後半は，冒頭の說話の〔論說部〕と同樣に語錄的性格を持つ文獻であると考える。前半の長梧子の發言については，その表現が感覺的であり，文學的傾向を持っているのに對し，後半の部分はいわば理知的であり思辯的傾向を持つものである。また，前半の長梧子は，理論的に說き伏せようとはせず，巧みな例などを用い感覺に訴えて作者の思想を傳達しようとしている。そして，作者の主張を論理的に展開させて論理に說き伏せようとする意圖が見られ，前半と後半とでは表現の仕方において違いがあるので，前半部分と後半部分は本來別の文獻であったと考えている。[14)]

以下實際に，第二章では莊子と弟子或いは論敵の惠子との對話，「二十三例の莊子と他者との對話の說話」の中でも，莊子との結びつきが容易に考えられ，全體のほぼ三分の二を占めている「莊子と弟子」・「莊子と惠子」の十三例を見ていく。

二．莊子と弟子・莊子と惠子の對話による說話

本論文では，莊子と關係の深い相手との說話によって，『莊子』書を探ることが目的であるので，最初に煩を厭わず本文及び譯文と說話全體の構成を擧げることにする。なお，各說話に付されている通し番號は，前章と同じものを引き續き利用している。また，文中のA－Bの區分であるが，Aは對話からなる說話を表し，語錄の要素を含むものが多い箇所を示している。Bは一つのまとまった說話からなり，Aの補足的役割を果たすことが多い箇所を示している。また語錄の定義は，一句內の語句が整っている（とりあえず，本論文では四字句，ないし五字句を中心としたものとする）・對句を形成している・押韻している・聯綿字（漢字2字よりなる雙聲や疊韻による擬態語

や人や物の形容）の使用・反語の使用・論理的文章による警句や格言になっている等のレトリックを使用していることを基本とする。また，原文の底本は新編諸子集成『莊子集釋』を利用しているが，句讀點等變更してある部分がある。[15]

【內篇】

「逍遙遊篇」

①惠子と莊子（1）

惠子謂莊子曰，「魏王貽我大瓠之種，我樹之成而實五石。以盛水漿，其堅不能自擧也。剖之以爲瓢，則瓠落無所容。非不呺然大也，吾爲其無用而掊之」。莊子曰，「夫子固拙於用大矣。宋人有善爲不龜手之藥者，世世以洴澼絖爲事。客聞之，請買其方百金。聚族而謀曰，『我世世爲洴澼絖，不過數金，今一朝而鬻技百金。請與之』。客得之，以說吳王。越有難，吳王使之將。冬，與越人水戰，大敗越人。裂地而封之。能不龜手一也，或以封，或不免於洴澼絖，則所用之異也。今子有五石之瓠，何不慮以爲大樽而浮乎江湖，而憂其瓠落無所容。則夫子猶有蓬之心也夫」。

惠子は莊子に向かって，「魏王は私に大ひょうたんの種を下さった。それを蒔いたら，五石（約95リットル）はあろうかという實がなった。飲み物を入れれば，重くて持ち上がらない。二つに裂いてひしゃくにしても，淺くて何も容れることができない。大きくてばかでかいが，役に立たないので，打ち碎いてしまったよ」といった。莊子はこたえていった。「あなたは大きな物を用いるのが下手ですね。宋國の人であかぎれの藥を上手に作る人がいて，代々眞綿を水にさらすことを生業としていた。旅人はそれを聞きつけると，製法を百金（約25キログラム）で買いたいと頼んだ。一族を集めて相談し，『私たちは代々代々眞綿を水にさらして來たが，儲けは數金だけだった。今 一朝にして製法が百金で賣れる。賣ってしまおう』といった。旅人はあかぎれの藥を手に入れると，吳王に（藥效を）說きに行った。越國との間に戰難が起こると，吳王は將軍に任命した。冬 越軍と水上で戰い，大敗させた。（その功績によって）吳王は封地を割いて與えた。あかぎれの藥效は同じでも，かたや領主に取り立てられ，方や眞綿を水にさらす生業から拔け出せないのは，用い方が異なるからだ。今，あなたは五石の大ひょうたんを持っているのなら，どうして大きな樽を作って，江湖に浮かべようとは考えずに，淺くて何も容れることができない，などと愚癡をこぼすのだ。まだまだあなたには物欲があるのではないかな」と。

全文がたとえ話を利用して論理的に「無用の用」について論を展開する，對話の說話で構成されている。全體が長短句から成り，語調が整っていないものの，レトリックの面から語錄としての性質を備えていることが分かる。論理的でこなれた文章になっているのは，語錄としての論說部を說話の中に取り込んで，文章を再構成した事による。佐藤によれば，①惠子と莊子（1）は，修辭による語錄としての要素は少ないが，齊物論篇と同樣，巧みに手を加えられており，論理的な展開を中心とする語錄と見ることができる。[16] 洴澼は綿を水でさらす雙聲の擬態語。[17]

②惠子と莊子（2）

惠子謂莊子曰，「吾有大樹，人謂之樗。其大本擁腫而不中繩墨，其小枝卷曲而不中規矩。立之塗，匠者不顧。今子之言，大而無用，眾所同去也」。莊子曰，「子獨不見狸狌乎。卑身而伏，以候敖者，東西跳梁，不避高下，中於機辟，死於罔罟。今夫斄牛，其大若垂天之雲。此能爲大矣，而不能執鼠。今子有大樹，患其无用，何不樹之於无何有之鄉，廣莫之野，彷徨乎无爲其側，逍遙乎寢臥其下。不夭斤斧，物无害者，无所可用，安所困苦哉」。

惠子は莊子に向かって，「私のところに大木があり，人はこれを樗と呼んでいる。その幹は節

くれ立って墨繩も當てられず，小枝はぐねぐね曲がってコンパスや定規も當てられない。道端に立っていても，大工は一顧だにしない。ところで，あなたの言說も，大きいだけで役に立たず，大衆が顧みないのも同じだね」といった。莊子はこたえていった。「あなたも山猫やイタチを見たことがあるだろう。身を低くして伏し，獲物を待ち構え，あちらこちらに跳ね回り，高いところも低いところも物ともしないが，罠にはまったり，網にかかって死んでしまう。ところがあの大牛は，空に垂れこめた雲のように大きい。その能力というと大きいだけで，鼠一匹も取れない。今，あなたは大木を持ちながら，役に立たないと心を痛めている。どうしてそれを「無何有（むこう）の鄉」や，「廣莫の野」に植えて，ゆったりとその傍らで無爲に過ごし，ゆうゆうとその下で寢そべらないのか。まさかりや斧で切られず，何者にも危害を加えられないのだから，役に立たないといって，心を痛めることはないのだ」と。

①と同樣，對話形式の說話であるが，全體が語調の調った四字句，ないし五字句を中心に構成されている。また，「何不樹之於无何有之鄉」，「彷徨乎无爲其側，逍遙乎寢臥其下」といった比較的長い文を除いても，全體の構成に支障をきたさない。擁腫は，木が節くれ立ち，こぶだらけのさまを表す疊韻の語。卷曲は，まがりくねったさまを形容する雙聲の語。彷徨・逍遙は，ともに自由氣ままで，何物にも拘束されない狀態をいう疊韻の語。[18] いずれもその前後の文は對句を形成している。この章は，語錄が後に對話形式の說話として再構成され，文意がよく通るよう作り替えられたと考えられる。また，編者によって篇の一番最後に意圖的に配置されている。

「德充符篇」

③惠子と莊子（3）

惠子謂莊子曰，「人故无情乎」。莊子曰，「然」。惠子曰，「人而无情，何以謂之人」。莊子曰，「道與之貌，天與之形，惡得不謂之人」。惠子曰，「旣謂之人，惡得无情」。莊子曰，「是非吾所謂情也。吾所謂无情者，言人之不以好惡內傷其身，常因自然而不益生也」。惠子曰，「不益生，何以有其身」。莊子曰，「道與之貌，天與之形，无以好惡內傷其身。今子外乎子之神，勞乎子之精，倚樹而吟，據槁梧而瞑。天選子之形，子以堅白鳴」。

惠子は莊子に向かって，「人間にはもともと感情がないのか」といった。莊子は，「そうだ」とこたえた。惠子は，「人間なのに感情がなければ，どうやって人間と言えるのか」といった。莊子は，「道が人間の顏かたちを與え，天が人間の身體を與えているのだから，これを人間と言わないわけにはいかない」とこたえた。惠子は，「それを人間というのであれば，感情がないわけがない」といった。莊子は，「それは私のいう感情ではない。私が，感情が具わらないというのは，人間が，好惡の感情によって自分自身を傷つけず，いつも自然に任せて，人爲的に生命の働きを延ばさないことをいうのだ」とこたえた。惠子は，「人爲的に生命の働きを延ばさなければ，どうやって身體を維持していけるのだ」といった。莊子は，「道が人間の顏かたちを與え，天が人間の身體を與えているのだから，好惡の感情によって自分自身を傷つけないようにするべきだ。ところが，あなたは自分の精神を磨り減らし，精力を盡くし，木に寄りかかってぶつぶつと語り，机にもたれて瞑想している。天があなたに身體を與えてくれたというのに，あなたは「堅白論」の詭辯をがなり立てて（精神を磨り減らし自分自身を傷つけて）いるのだ」といった。

對話形式の說話であるが，全體が語調の調った四字句，ないし五字句を中心に構成され，「言人之不以好惡內傷其身，常因自然而不益生也」といった比較的長い一文を除いても全體の構成に支障をきたさない。興膳宏によると，精・瞑・形・鳴は押韻している。[19] 語錄が中心の說話である。この章についても，前出「逍遙遊」②と同樣，語錄が後に對話形式の說話として再構成され，文

意がよく通るよう作り替えられた文であると考えられる。また，編者によって篇の一番最後に意圖的に配置されている。

佐藤は，前章の「逍遙遊篇」①惠子と莊子 (1)･②惠子と莊子 (2)，「德充符篇」③惠子と莊子 (3)，「外物篇」⑰惠子と莊子（9）に關連する內容について次のように述べている。

「德充符篇」の說話は，惠子が莊子を相手に論理的問題について議論の形で話が進められている。直接名家の命題が揭げられているわけではないが，「德充符篇」の莊子の發言の最後に，「子以堅白鳴」とあり，名家としての惠子像が認められる。しかし，「外物篇」では，批判を莊子個人あるいは個人の學說に與えていて，惠子が自己の論理を展開させているわけではない。しかも，「外物篇」の方が，「子言無用」とあるのに對し，「逍遙遊篇」の方は，「今子之言，大而無用」とあるように，莊子の學說が役に立たないといっている點に共通性がある。「子言無用」は，むしろ莊子の議論を展開させる導入として效果的であり，莊子のたとえ話に答える形での惠子の『無用』という言葉は，莊子の言葉にはずみをつけ，莊子の理論を浮き立たせており，惠子は莊子の學說を引き出す「御膳立て」の意味しかない。「德充符篇」･「秋水篇」の問答においても惠子が莊子をひきたたせる役割を擔っているが，そこには名家の惠子像が現れているのに對し，「外物篇」あるいは「逍遙遊篇」の問答の方は，莊子の論敵が惠子である必要性もなく，名家の思想家である必要性もない。莊子の發言を浮き立たせるために論敵としての惠子を登場させたともとれる。「德充符篇」･「秋水篇」は，會話のテンポも速く，特に「秋水篇」の方は具體的にその場面が想像できるほどなのに對し，「外物篇」･「逍遙遊篇」は，たとえ話が引用され閒も長くなっている。特に「逍遙遊篇」の問答は，惠子の發言を含め四つの會話にすべてたとえ話が引用され，「外物篇」の說話より，より巧みに手が加えられた感がある。「逍遙遊篇」の問答は，實際の會話ではなく創作され巧みに修飾が施されているようである。修飾というよりも，ここで引用されているたとえ話の材料が手許にあり，それをもとに巧みに組み立てられ創作されたものでないかと思われるといっている。[20]

さらに，內篇の莊子の記述は，「逍遙遊篇」の他に，「齊物論篇」の「昔者莊周夢爲胡蝶。……」と，「德充符篇」の惠子・莊子問答のみであり，『莊子』內篇が莊周の自著である，もしくは莊周と關係があるとされているのは，この部分があるからに他ならず，どちらも作爲的に篇の末尾に置かれている。それは，一篇全體の效果を考え，その中で配置せられたものであるといえる。『莊子」內篇あるいは內篇の各篇を莊周と結びつけようとする意圖のもとに，莊周の登場する說話を末尾に置いたのではないかと考えられる。そして，『莊子』中の說話に莊周または莊子に關する記述は三十一箇條あるが，これに類似した形式のものはこの他にはない。この部分を見る限り，莊周という人物がいて，彼自らがこの部分を記したかどうかは斷定する材料に缺けるが，「逍遙遊篇」も「齊物論篇」も最後に莊周に關する說話を載せていることから，これらの文獻を莊周という人物に關係づけようという意圖のもと，このような編輯になったと見ることもできる。「齊物論篇」の最後に付せられた莊周が夢に胡蝶となった話は，それぞれの前半とは異なる資料であり，論理的主張を主體にしたという點において語錄である可能性もある。「齊物論篇」の場合は，それぞれの說話をつなげれば，一つのテーマに結びつけることはできるが，「逍遙遊篇」のように說話と論說文を巧みに織り込んではいないともいっている。[21]

佐藤も述べているように，內篇－特に「養生主」までの文章について，『莊子』全書を莊子の作とするために編者の手が大きく加わっている。そして莊子を說話の題材，主人公にしようという目的のために，たとえ話としての語錄を說話に織りこんでいっているものは，內篇に限らず，外･雜篇についても存在するのである。不完全で練られていないものの，語錄と說話との構成によって構成されている說話を多く見ることができるからである。

以下，引き續き，外・雜篇の對話の說話についても見ていくことにする。

【外篇】

「秋水篇」

⑥惠子と莊子（4）

惠子相梁，莊子往見之。或謂惠子曰，「莊子來，欲代子相」。於是惠子恐，搜於國中三日三夜。莊子往見之，曰，「南方有鳥，其名爲鵷鶵，子知之乎。夫鵷鶵發於南海而飛於北海，非梧桐不止，非練實不食，非醴泉不飲。於是鴟得腐鼠，鵷鶵過之。仰而視之曰，『嚇』。今子欲以子之梁國而嚇我邪」。

惠子は梁の宰相であった。ある時，莊子は惠子に會いに出かけた。ある者が惠子に，「莊子がやって來て，あなたに代わって宰相の位に就こうとしている」といった。そこで惠子は恐くなり，國中を三日三晩にわたって搜させた。莊子は出向いて行って惠子に會い，次のようにいった。「南方に鳥がいて，その名は鵷鶵というのだが，あなたは知っているか。そもそもこの鵷鶵は，南海を飛び立って，北海を目指して飛んでいく途中，梧桐でなければ止まらず，竹の實でなければ食べず，甘露の泉の水でなければ飲まないのだ。そこである時，一羽のフクロウが腐った鼠を手に入れたところに，鵷鶵がたまたま通りかかった。すると，（獲物を奪われまいとフクロウは，）仰ぎみて凝視し，一聲『クワッ』と叫んだというのだ。今あなたは梁國（の宰相の位）のことで，私を『クワッ』と叫ぶつもりなのかな」と。

對話形式の說話であるが，全體が語調の調った四字句，ないし五字句を中心に構成されている。また，文意を補足している「夫鵷鶵發於南海而飛於北海」，「於是鴟得腐鼠」，「今子欲以子之梁國而嚇我邪」といった比較的長い語句を除いたとしても，全體の構成に支障をきたさない。もともと四字句，ないし五字句を中心に構成された語錄であったが，後に對話形式の說話として再構成され，文意がよく通るよう作り替えられたと考えられる。

⑦惠子と莊子（5）

莊子與惠子遊於濠梁之上。莊子曰，「儵魚出遊從容，是魚之樂也」。惠子曰，「子非魚，安知魚之樂」。莊子曰，「子非我，安知我不知魚之樂」。惠子曰，「我非子，固不知子矣。子固非魚也，子之不知魚之樂全矣」。莊子曰，「請循其本。子曰『汝安知魚樂』云者，旣已知吾知之而問我。我知之濠上也」。

莊子は惠子と一緒に濠水の橋のたもとでぶらぶらしていた。莊子は，「ハヤがゆったりと泳ぎ回っている。これこそ魚の樂しみだ」といった。これを聞いて惠子は，「あなたは魚でもないのに，どうして魚の樂しみが分かるのか」といった。莊子は，「あなたは私でもないのに，どうして私に魚の樂しみが分からないということが分かるのだ」と應えた。惠子は，「私はあなたでないから，確かにあなたのことは分からない。しかし當然あなたは魚でないのだから，あなたに魚の樂しみが分からないのは，間違いない」と應えた。莊子は，「根本に立ち返って考えてみよう。あなたは，『どうして魚の樂しみが分かるのか』といったのは，あなたは私が魚の樂しみを分かっていることを知っていて問いかけたのだ。私にはさっき濠水のほとりで，魚の樂しみが分かったのだよ」と應えた。

全文が對話の說話で構成されている。語調が整っている問答體で書かれている。また，「齊物論篇」の篇末の說話と同樣，論理的に論を進めていることから，語錄と見なすことが出來る。

「至樂篇」

⑧惠子と莊子（6）

莊子妻死。惠子弔之，莊子則方箕踞鼓盆而歌。惠子曰，「與人居長子，老身死。不哭亦足矣，

又鼓盆而歌，不亦甚乎」。莊子曰，「不然。是其始死也，我獨何能无概然。察其始而本无生。非徒无生也，而本无形。非徒无形也，而本无氣。雜乎芒芴之閒，變而有氣，氣變而有形，形變而有生。今又變而之死。是相與爲春秋冬夏四時行也。人且偃然寢於巨室，而我噭噭然隨而哭之，自以爲不通乎命，故止也」。

莊子の妻が死んだ。惠子が弔問に行くと，莊子はちょうど足を投げ出して坐り，鉢を叩いて歌っているところだった。惠子は，「連れ合いになって子供を育て，年を重ねた仲じゃないか。哭さないというだけでも充分非禮なのに，その上 鉢を叩いて歌うとは，ひどすぎやしないか」といった。莊子は應えていった。「そうではない。これが死んだ當初は，私も胸に堪えた。しかし，これの始まりをじっくりと考えてみると，もともと生命はなかった。いや，生命がなかっただけではなく，もともと形さえなかった。いや，形がなかっただけではなく，もともと氣すらなかったのだ。暗く混沌とした物の中で，雜然と混じりあっていたものの中から氣が生まれ，氣が變化して形が生まれ，形が變化して生命が生まれた。そして，今また變化が起こって死に向かった。これらは春夏秋冬の四季を相互に繰り返すことと同じだ。人が（天地という）巨大な寢室でゆったりと眠りにつこうとしているときに，私が側を離れずウオーウオーと哭していたのでは，自分自身それこそ生命の道理に通じないと思い，それで止めてしまったのだ」と。

對話形式の說話であるが，全體が語調の調った四字句，ないし五字句を中心に構成されている。「莊子則方箕踞鼓盆而歌」，「我獨何能无概然。察其始而本无生。非徒无生也」，「雜乎芒芴之閒･･･以下の文」といった文意を補足している比較的長い語句を除いたとしても，文意は通り，全體の構成に支障をきたさない。もともと四字句，ないし五字句を中心に構成された語錄であったが，後に對話形式の說話として再構成された段階で修辭が加えられ，文意がよく通るよう作り替えられたと考えられる。「察其始而本无生･･･而本无形」は，興膳宏によると，生と形で押韻している。「氣變而有形，形變而有生」は，形と生で押韻している。レトリックの面でも語錄としての性質を備えている。[22)]

「山木篇」

⑩莊子と弟子（1）

A　莊子行於山中，見大木，枝葉盛茂，伐木者止其旁而不取也。問其故，曰，「无所可用」。莊子曰，「此木以不材得終其天年」。夫子出於山，舍於故人之家。故人喜，命豎子殺鴈而烹之。豎子請曰，「其一能鳴，其一不能鳴，請奚殺」。主人曰，「殺不能鳴者」。明日，弟子問於莊子曰，「昨日山中之木，以不材得終其天年。今主人之鴈，以不材死。先生將何處」。

B　莊子笑曰，「周將處夫材與不材之閒。材與不材之閒，似之而非也。故未免乎累。若夫乘道德而浮游則不然。无譽无訾，一龍一蛇，與時俱化，而无肯專爲。一上一下，以和爲量，浮游乎萬物之祖，物物而不物於物。則胡可得而累邪。此黃帝・神農之法則也。若夫萬物之情・人倫之傳，則不然。合則離，成則毀，廉則挫，尊則議，有爲則虧，賢則謀，不肖則欺。胡可得而必乎哉。悲夫，弟子志之。其唯道德之鄉乎」。

A　莊子は，山中を歩いていて，枝葉のよく茂った一本の大木を目にした。木こりたちは，その傍に立ち止まったが伐ろうとしない。わけをたずねると，「使い道がない」という返答だった。莊子は，「この木は役に立たないから，天壽を全うできたのだ」といった。莊周先生は山から出ると，舊知の家に泊まった。舊友は喜び，召使いに鵞鳥をつぶして料理するよう言いつけた。召使いが「一羽はよく鳴きますが，一羽は鳴きません。どちらをつぶしましょう」とたずねると，主人は，「鳴かない方をつぶしなさい」と答えた。明くる日，弟子が莊子に，

「昨日の山中の大木は，役に立たないために天壽を全うできました。ところがご主人の鵞鳥は，役に立たないため殺されました。先生は一體どちらのお立場ですか」と尋ねた。

B　莊子は笑って答えた。「私 周は，役に立つのと役に立たないものの中間に身を置こう。しかし，役に立つのと役に立たないものの中間というのは，正しいように見えるが實はそうでない。だから，まだ面倒なことから逃がれられないのだ。ところが，あの道とその働きに乘って，自由に浮遊する生き方は大違いだ。譽れにも貶りにも超然として，天翔る龍になったり地に潛む蛇になったりし，時の流れとともに變化して，決められた生き方に固執しない。天高く飛翔したかと思えば，地の深みに下り，調和を內に保つことを基準としながら，萬物の根源に浮游して，あらゆる物を物として存在させながら，自己は他の物によって左右されることはない。そうであるなら，面倒なことから逃がれられないことはないのだ。これが，神農・黃帝といった古の聖王が模範とした生き方なのだ。しかし，萬物の實情や，人の道として傳えられてきたものとなると，そうはいかない。合えば分裂し，完成したかと思えば崩壞し，淸廉であれば挫かれ，高貴であれば沒落し，有能であれば損なわれ，賢明であれば謀略に陷れられ，不肖であれば欺される。何一つ確實なものはないのだ。悲しいことだね，君も覺えておきなさい。據り所となるのはただ道とその働きが宿す世界だけなのだ」と。

Aでは對話の中で「材と不材との間」について提示し，Bでは「道とその働き」を據り所として生きるべきことを主張する。全體が對話形式の說話で構成されているが，Aの對話に對して，Bでは冒頭で「材と不材との間に身を置こう」と回答しながら，實際は「道とその働き」についての解說・說明となっている。Aの對話を中心とする說話に，Bの語錄を中心とする說話が加わることによって成立したものと思われる。興膳宏によると，「无譽无訾，一龍一蛇，與時俱化，而无肯專爲。一上一下，以和爲量，浮游乎萬物之祖」は，訾・蛇・化・爲・下・祖が押韻している。「合則離，成則毀，廉則挫，尊則議，有爲則虧，賢則謀，不肖則欺」は，離・毀・挫・議・虧・謀・欺が押韻している。[23] Aの對話を中心とする說話に對し，Bの說話はレトリックが用いられている。また，語調も比較的整っていることから，Bの說話は語錄としての性格を備えているといえる。なお，池田は「無用の用の思想を一歩進めた文章である。編纂の時點で『呂氏春秋』必己篇から取った。『呂氏春秋』の原文は戰國末期の作である」とする。[24]

⑫莊子と弟子＝藺且（2）

B　莊周遊乎雕陵之樊，覩一異鵲自南方來者，翼廣七尺，目大運寸，感周之顙而集於栗林。莊周曰，「此何鳥哉。翼殷不逝，目大不覩」。蹇裳躩步，執彈而留之。覩一蟬方得美蔭而忘其身。螳蜋執翳而搏之，見得而忘其形。異鵲從而利之，見利而忘其眞。莊周怵然曰，「噫，物固相累，二類相召也」。捐彈而反走。虞人逐而誶之。

A　莊周反入，三月不庭。藺且從而問之，「夫子何爲頃間甚不庭乎」。莊周曰，「吾守形而忘身。觀於濁水而迷於淸淵。且吾聞諸夫子曰，『入其俗，從其俗』，今吾遊於雕陵而忘吾身，異鵲感吾顙，遊於栗林而忘眞，栗林虞人以吾爲戮。吾所以不庭也」。

B　莊周が，雕陵の園林を心地よくぶらぶらとしていると，一羽の奇妙な鵲が南方から近づいて來るのが目にとまった。翼の大きさは幅七尺（約1.5メートル），目玉の大きさは直徑一寸（約2.3センチメートル），莊周の額をかすめて栗林に舞い降りた。莊周は，「これは何という鳥かな。翼はでかいのに遠くに飛べず，目玉は大きいのにこちらが見えないようだ」とつぶやいた。着物の裾をからげて早足で忍び寄り，彈き弓を手に執って射ようとした。ふと見ると，一匹の蟬が今まさに心地よさ氣な木蔭を手に入れて，我が身のことなどすっかり忘れている。（その蟬を）螳蜋が鎌を振り上げて打とうと狙い，獲物に目が向いて我が身のことを

すっかり忘れている。（その螳蜋を）奇妙な鵲が付け狙っているが，欲に目がくらんで本當の自分をすっかり忘れている。莊周はぞうっと怖くなり，「ああ，萬物はもともと互いに傷つけあい，類が類をよぶ關係なんだ」とつぶやいた。そのまま彈き弓を投げ捨てると，身をひるがえして走り出した。すると，園林の番人が追いかけて來て，「栗泥棒」ととがめた。

A　莊周は家に歸ると，何ヶ月もの間じっとふさぎこんでいた。（弟子の）藺且がその樣子を見て，「先生はどうしてこの頃ひどくふさぎこんでおられるのですか」と尋ねた。莊周は應えていった。「私は，上面を整えることに氣を取られて，我が身のことを忘れていた。（世間の）泥水に目を奪われて，（眞理の）淸らかな淵を見失ってしまったようだ。それに，私は先生から『その俗に入りては，その俗に從え』と敎えられたが，この度，雕陵をぶらぶらとして我が身を忘れていたら，奇妙な鵲に額をかすめて飛ばれ，栗林の中をぶらぶらしているうちに本當の自分をすっかり忘れていたら，栗林の番人に辱めを受けて追いかけられる，という始末だ。私はそんなわけでふさぎこんでいるのだよ」と。

Bは雕陵の園林で奇妙な鵲を見つけた莊子であったが，實は鵲は蟷螂を狙い，蟷螂は蟬を狙っていた。そして，莊子自身栗泥棒に間違われる始末であったことをまとめた說話である。Aでは冒頭で「材と不材との間に身を置こう」と回答しながら，實際は「道とその働き」についての解說・說明となっている。Bの說話はレトリックが用いられ，地の文を除いた部分では語調が整っていることから，語錄としての性格を備えている。そして本章は，その語錄を中心とする說話に，Aの對話の說話が加わることによって成立したものと思われる。長文の說話の後に對話の說話が置かれている。興膳宏によると，「睹一蟬方得美蔭而忘其身。螳蜋執翳而搏之，見得而忘其形。異鵲從而利之，見利而忘其眞」は，身・形・眞が押韻している。「吾守形而忘身。觀於濁水而迷於淸淵」は，身・淵が押韻している。[25] 前者は平聲十一眞で，後者は平聲一先の韻のグループで押韻を識別しているものと思われる。なお，池田は「事物の連鎖の中に生きる人間が，いかにして吾が身の眞を取り戻すかというテーマを探求する。古い道家哲學の忘身というカテゴリーを見捨てている點が注目される。戰國末期～前漢初期の作であろうか」とする。[26]

【雜篇】

「徐無鬼篇」

⑮惠子と莊子（7）

A　莊子曰，「射者非前期而中，謂之善射，天下皆羿也，可乎」。惠子曰，「可」。莊子曰，「天下非有公是也，而各是其所是，天下皆堯也，可乎」。惠子曰，「可」。

B　莊子曰，「然則，儒，墨，楊，秉四，與夫子爲五。果孰是邪。或者若魯遽者邪。其弟子曰，『我得夫子之道矣，吾能冬爨鼎而夏造冰矣』。魯遽曰，『是直以陽召陽，以陰召陰，非吾所謂道也。吾示子乎吾道』。於是爲之調瑟，廢一於堂，廢一於室。鼓宮宮動，鼓角角動。音律同矣。夫或改調一弦，於五音无當也，鼓之二十五弦皆動。未始異於聲，而音之君已。且若是者邪」。

A　惠子曰，「今夫儒・墨・楊・秉，且方與我以辯，相拂以辭，相鎮以聲，而未始吾非也。則奚若矣」。

B　莊子曰，「齊人蹟子於宋者，其命閽也不以完，其求鈃鍾也以束縛，其求唐子也而未始出域。有遺類矣。夫楚人寄而蹟閽者，夜半於无人之時而與舟人鬬，未始離於岑，而足以造於怨也」。

A　莊子は，「弓を射る者が適當に射て當たったとし，これを弓の上手というなら，世の中の人々は，全て羿（のような弓の達人）になるが，それでよいのだろうか」といった。惠子がそれに「よいとも」と答えた。莊子は，「世の中には（普遍的な）正しい眞理は存在しないが，それぞれが自說を正しい眞理だと主張するならば，天下中の人々は全て堯（のような聖人）

ということになるが，それでよいのだろうか」といった。惠子がそれに「よいとも」と答えた。

B　莊子はいった。「そうだとすると，儒家・墨家・楊朱派・公孫龍派の四學派に，（すべてを認める）あなたを加えて合計五學派となる。一體，どれが正しい眞理なのだろうか。或いはあの魯遽のようなものではないのか。魯遽の弟子は，『私は先生の道を會得しました。私は冬に（燥いた古い灰を燃やして）鼎で煮炊きすることができ，夏に（生ぬるい水から）氷を作ることができるようになりました』といった。魯遽は，『それはただ陽で陽を招き寄せ，陰で陰を招き寄せたにすぎず，わたしのいっている道ではない。お前にわたしの道を見せよう』といった。そこで弟子のために（二面の）瑟を調律し，一面を表座敷に置き，もう一面を奥座敷に置いた。（一方の瑟で）宮の音階をかき鳴らすと（もう一方でも）宮の音が鳴り出し，（一方の瑟で）角の音階をかき鳴らすと（もう一方でも）角の音が鳴り出した。音律が同じだから（共鳴したの）である。それから表座敷の一本の弦の調律し直して，（宮・商・角・徵・羽の）五音のどれにも合わないように（して，これをかき鳴ら）したところ，奥座敷の二十五本の弦が一齊に鳴り出した。どの音階とも決して合わない音が，あらゆる音の中心だったのだ。まあ，（眞理とは）こういったものではないのか」と。

A　惠子は，「あの儒家・墨家・楊朱派・公孫龍派（の各派）は，今まさに私と辯論をしていて，言葉で攻擊しあい，互いに聲を張り上げて壓倒しようとしているが，まだ誰も私を論破できた者はいない。どういうことかな」といった。

B　莊子は，「齊の人は子どもを宋に賣り飛ばしたが，門番の仕事は五體滿足ではなれないのでわざと障害者にしてしまった。酒壺を手に入れたときは繩がけをして大切に運ぶのに，行方知れずの子どもを探しに，（住んでいる）町から一歩も出ようとはしなかったということだ。人倫を無視し常識に反することだな。（また）楚の人で片足を失って賣り飛ばされて門衞をしていた者がいたが，眞夜中で人もいない時間に船頭といさかいをし，まだ船が岸を離れもしない內に，怨みを買うことになってしまった。（君の主張もその程度のものではないのかね）」。

Aでは惠子の羿や諸子に對する見方を通じて問題を提起し，Bでは一方では魯遽の說話を用いて道の眞理とは普遍的なものではないことを示し，もう一方では惠子の主張を常識に反する主張に過ぎないと批判している。いずれも惠子と莊子の會話の中で說話が完結しているのだが，Bでの說話はそれぞれ別種のものなので，本來二つの章だったものが，一つの章として再編成されたと考えることも出來る。多重構造になっている章である。なお，池田は惠子と莊子の問答・逸話を竝べる「儒・墨・揚・秉・惠」のいずれとも異なる莊子（道家）の思想が，それらに君臨しうるものであることを主張し，その立場から惠子を批判する。前漢初期に著された司馬談「六家要旨」や『淮南子』要略篇の考えと通ずるものがあるとする。[27]

⑯惠子と莊子（8）

莊子送葬，過惠子之墓，顧謂從者曰，「郢人堊慢其鼻端若蠅翼，使匠石斲之。匠石運斤成風，聽而斲之，盡堊而鼻不傷，郢人立不失容。宋元君聞之，召匠石曰，『嘗試爲寡人爲之』。匠石曰，『臣則嘗能斲之。雖然，臣之質死久矣』。自夫子之死也，吾无以爲質矣，吾无與言之矣」。

莊子は（ある人の）送葬から（歸る途中），惠子の墓に立ち寄った。そこで振り返って，弟子たちに向かって莊子はいった。「郢の左官は，漆喰を自分の鼻先に蠅の羽ほどつけて，大工の棟梁（匠人）の石に削り取らせた。棟梁の石はまさかりを振るうと風が舞ったが，びゅーんという音に任せて削り落とした。しっくいは綺麗に落ちて，鼻はまったく傷つかず，郢の左官は立ったまま顏色一つ變えなかった。宋の元君はこの話を耳にすると，棟梁の石を召し寄

せて，『一つ余のためにしっくいを削る技をやってくれないか』といった。棟梁の石は，『私めは，以前はしっくいを削ることができました。しかしながら，相方の左官はもうとっくに死んでしまっている（から技を披露することができません）』。と答えたそうだ。（わたしも惠）先生に先立たれてから，ともに議論する相方を失ってしまったよ」と。

好敵手惠子を亡くした莊子の心境を「匠石の說話」を用いて弟子たちに語っている。全文が對話の說話で構成されている。話の筋が論理的に展開している點は，語錄としての性質を備えている。しかし，修辭に乏しく，レトリックの面からは，語錄としての性格を見出すことは出來ない。先に③にて，佐藤の說を擧げたが，この文章も短い說話ではあるが，語錄と說話とを巧みに併せ再構成させた文章であるかもしれない。なお，池田は莊子が惠子の沒後，言論の好敵手を失ったと嘆く。いずれも前漢初期の作と考えなければならないとする。[28)]

「外物篇」

⑰惠子と莊子（9）

惠子謂莊子曰，「子言无用」。莊子曰，「知无用而始可與言用矣。天地非不廣且大也，人之所用容足耳。然則廁足而墊之，致黃泉，人尙有用乎」。惠子曰，「无用」。莊子曰，「然則无用之爲用也亦明矣」。

惠子が，莊子に向かって，「あなたのいうことは何の役にも立ちませんね」といった。莊子は答えていった。「何の役にも立たないことについて理解できて始めて役に立つことについて一緒に語りあうことができるのだ。一體，天地は果てしなく廣大ではあるが，人が利用しているのは足を置く場所だけだ。しかしながら，足の寸法を測り（そのスペースを殘して）深く掘り下げて，あの世まで達したとしたら，それでもなお（その場所は）有用だろうか」と。惠子は，「役に立たない」といった。莊子は，「それならば，役に立たないものこそ役に立つものであることは，明らかではないか」といった。

「無用の用」についての論が，莊子と好敵手惠子との對話の說話によって展開している。⑯と同樣，全體が論理的に展開している點は，語錄としての性質を備えているが，修辭に乏しく，レトリックの面からは，語錄としての性格を見出すことは出來ない。この文章も極めて短い說話ではあるが，語錄と說話とを巧みに併せ再構成させた文章であるかもしれない。

「寓言篇」

⑱惠子と莊子（10）

莊子謂惠子曰，「孔子行年六十而六十化。始時所是，卒而非之。未知今之所謂是之非五十九非也」。惠子曰，「孔子勤志服知也」。莊子曰，「孔子謝之矣。而其未之嘗言。孔子云，『夫受才乎大本，復靈以生』。鳴而當律，言而當法。利義陳乎前，而好惡是非直服人之口而已矣。使人乃以心服而不敢蘆立，定天下之定。已乎已乎。吾且不得及彼乎」。

莊子は，惠子に向かって，「孔子は六十年生きてきて六十回生き方を變えた。始めは正しいと思っていたことも，終わりには否定した。今は正しいと思っている生き方も，五十九回の否定と同じように否定してしまうかもしれないよ」といった。惠子は，「孔子は自分の意志を强くし知識を深めようとしたからでしょう」と應えた。莊子はいった。「孔子は（意志と知識を重んじる境地を）とっくに捨て去っているよ。しかも，まだそれらについて一度も口に出していったことはない。孔子は，『人間は道の根源から才知を授けられているのだから，（道に基づく）靈妙な本性を內面に抱いて生きていくのだ』といった。孔子が聲を發して（歌えば）音律に適い，言葉を發して（議論すれば）法規に當る。利益正義を（諸侯の）前で陳べたてるが，好惡是非はただ人々のいうままに任せているだけだ。人々を心服させて逆らわせず，世の中

の眞實を定める。止めよう止めよう。私なんかとても孔子には及ばないな」と。

莊子と惠子との對話によって孔子が六十年間に六十回もその生活を變えてきた，そのなすがままの本性に從って生きる生き方について述べている。⑯・⑰と同樣，全體が論理的に展開している點は，語錄としての性質を備えているが，修辭に乏しく，レトリックの面からは，語錄としての性格を見出すことは出來ない。この文章も短い說話ではあるが，語錄と說話とを巧みに併せ再構成させた文章であるかもしれない。

「列禦寇篇」

㉓莊子と弟子（3）

A　莊子將死，弟子欲厚葬之。莊子曰，「吾以天地爲棺槨，以日月爲連璧，星辰爲珠璣，萬物爲齎送。吾葬具豈不備邪。何以加此」。弟子曰，「吾恐烏鳶之食夫子也」。莊子曰，「在上爲烏鳶食，在下爲螻蟻食。奪彼與此，何其偏也」。

B　以不平平，其平也不平。以不徵徵，其徵也不徵。明者唯爲之使，神者徵之。夫明之不勝神也久矣。而愚者恃其所見入於人。其功外也。不亦悲乎。

A　莊子が亡くなろうとする時，弟子たちは手厚く埋葬しようとした。莊子はいった。「私は天地を棺桶とし，日月を（葬禮を飾る）一對の璧玉とし，星辰を（亡骸に添える）珠玉とし，萬物を死出の土產とする。私の葬禮の道具は十分ではないか。これ以上何も要らないよ」と。弟子たちは，「私たちは先生のご遺體が烏や鳶の餌とならないか心配なのです」と應えた。莊子は，「地上では烏や鳶の餌となり，地下では螻や蟻の餌となる。あちらのを奪ってこちらにやるのでは，何とも不公平だね」といった。

B　不公平なものを公平と見なすならば，その公平さは本當の公平さではない。證明できないものを證明できるとするならば，その證明は本當の證明ではない。明晰な者はただ知識に振り回されているだけであって，精神の自然のままの働きを主宰する者だけが證明できる。一體（知識による）明晰さが精神の自然のままの働きに及ばないのは昔からのことだ。それなのに愚者は目に留まったものに賴りきって，人爲の世界に加わってしまう。その（成し遂げた）お手柄は外れている。何とも悲しいことではないか。

Aでは莊子の臨終に際し，弟子との對話を通して葬儀の不要を說く。Bでは一轉して，愚者は人爲的な知識による明晰さが，精神の自然のままの働きに及ばないことを分かっていないと嘆いている。本來全く異なる說話が組み合わされた說話である。Bでは四字句，ないし五字句を中心とした構成で語調が調っている。また，論理的な思考によって論を展開していることから，語錄としての性格を備えている說話ということが出來る。死は道家の重要なテーマの一つであり，養生思想や神仙思想と關係づけられて，語られることが多かった。莊子の臨終のモチーフについても，古くからあったものと思われる。また，莊子を主人公とする對話の說話の中で，死について取り上げると言うことは，自ずと身近な人物との對話と言うことになる。師である莊子の死に對する見解や弟子たちとの對話について，後學の者達が手を加えたり改作したりすることは，客觀的に見て有り得ない事と思われる。

以上のように，莊子と弟子，莊子と惠子の對話による說話は分類されるが，一見するとAの對話形式の說話とBの說話とが組み合わされ多重構造を爲している說話は，池田知久の分類に照らし合わせれば，比較的後に制作されているように見える。そして，先に設けた語錄としての基準に合う說話は，內・外篇に集中して現れ，修辭と無關係な章は雜篇中心に現れていることに注目させられる。さらに，編者によって意圖的に篇の一番最後に置かれている說話も多く見られる。

また，本來弟子や論敵である惠子は，極めて近い關係であるので，それなりに重視されたり假託されたりし，僞作されることもなく，莊子を權威付けするのに使われると思われる。しかし，惠子や弟子との問答の作品の作成年代の中には，池田知久によって漢代まで押し下げられてしまっているものもある。現行本『莊子』は，語錄と說話とが合わさって構成されているが，他の思想家のテクニカルタームが含まれていることによって，その一文の成立年代を特定することは正しいのかもしれない。しかし，『莊子』の雜多な文章が，說話と語錄との複雜な組み合わせによって成り立っているのだと考えると，章全體の成立年代を押し下げてしまう方法をとることには抵抗がある。

次章では對話の說話の成立過程と成立年代にスポットを當て，『莊子』編纂の特徵と殘されている疑問點を見ていくことにする。

三．語錄としての莊子と對話を主とした說話の展開

通し番號③⑧⑩⑫⑮⑯⑱の七點の說話は，池田知久によっていずれも成立年代が，漢代にまで掛かる可能性が高いとして擧げられているものである。作品の構成はそれぞれ，語錄を含む說話から構成されるもの・語錄を含まない說話から構成されるもの・A－B型から構成される說話である。語錄が說話の最も古い部分を占めており，後に一般的な說話が作られたり，補足されたりして現行本が形成されたと假定すると，A－B型から構成される說話の內，A・Bのどちらか，或いは文章の一部分に語錄が含まれていることも充分に考えられるので，更に精査する必要がある。

そして，Aの對話を中心とする說話に，Bの說話が加わることによって成立したものと考えられるA－B型から構成される「山木篇」の⑩莊子と弟子（1）・⑫莊子と弟子＝藺且（2），「田子方篇」の⑮莊子と惠子（7）であるが，⑩に關して下P176池田知久は，無用の用の思想を一步進めた文章であり，編纂の時點で『呂氏春秋』必己篇から取った。『呂氏春秋』の原文は戰國末期の作であるとする。また，⑫に關しては，事物の連鎖の中に生きる人間が，いかにして吾が身の「眞」を取り戻すかというテーマを探求する古い道家哲學の「忘身」というカテゴリーを見捨てている點が注目されるとしている。[29] 前者に關しては，A－B型の說話を形成するときに題材を『呂氏春秋』に求めた可能性もぬぐえない。また，後者に關しては，「忘身」自體が『莊子』書中の坐忘や心齋の概念とは異なるので，池田の批判は當たらないのではないかと思われる。先秦諸子の思想から抽出されたテクニカルタームを含んでいてもその文章がそのまま全て外的な影響を受けて成立しているとはいえない。なぜなら多くの章が元々あった多くの語錄が組み合わされ，その上で說話と一緖になって成立しているからである。

以下，池田知久によって漢代にまでその作成年代が押し下げられてしまっている說話について，具體的に見ていくことにする。

「德充符篇」③莊子と惠子（3）の說話は，池田知久によって戰國最末期～前漢初期の作とされているが，②同樣，もともと四字句，ないし五字句を中心に構成された語錄である。池田は，篇の後半に行くほど後世に作られたと考えられ，前章が生まれた後に生まれた，それを補うための補足であろうとしているが，『莊子』中の說話はそれぞれ獨立したものと考えるべきであり，その篇の中のそれ以前の部分との結びつきを前提にして考えるべきではない。[30]

また，「至樂篇」⑧莊子と惠子（6）の說話は，池田は戰國末期～前漢初期の作とするが，對話形式の說話で，もともと四字句，ないし五字句を中心に構成された語錄である。[31] 先に述べたように，莊子を主人公とする對話の說話の中で，死について取り上げると言うことは，自ずと身近

な人物との對話と言うことになる。師である莊子の死に對する見解や弟子たちとの對話について，後學の者達が手を加えたり改作したりすることは，客觀的に見て有り得ないのである。學派が形成されれば，『論語』のように弟子との對話が生まれ，一人称の表現から對話の文章も盛り込まれていくはずである。そして前述したように，弟子や身近な者との對話は，學派を繼承していく者達にとって，改編したり僞ったりすることは困難である。

佐藤明も何らかの形で死について扱ったものを取り擧げてみるとし，漫然と思いついたまま「莊子の妻死に，惠子弔う（至樂）」·「莊子楚に行き，髑髏を見る（至樂）」·「莊子，惠子の墓を過る（徐無鬼）·「莊子將に死せんとす（列禦冠）」といった四點の說話を擧げているが，結果として對話の說話を漠然と擧げても「莊子－惠子」の說話が中心となっている。[32] 死は養生思想を扱う道家にとって重要なテーマの一つであるが，對話の說話の中心に，莊子とより關係の深い弟子なり惠子なりが想定されるのは必然の結果だからである。

次に，田子方篇⑮莊子と惠子（7）の說話について，池田は前漢初期の作とし，「儒·墨·揚·秉·惠」のいずれとも異なる莊子（道家）の思想が，それらに君臨しうるものであることを主張し，その立場から惠子を批判する。そして前漢初期に著された司馬談「六家要旨」や『淮南子』要略篇の考えと通ずるものがあると述べている。[33] また，「徐無鬼篇」⑯莊子と惠子（8）について，池田は莊子が惠子の沒後，言論の好敵手を失ったと嘆く。前漢初期の作と考えなければならない，としている。[34] この章は，「至樂篇」⑧莊子と惠子（6）と同樣，死について扱っている。それから「寓言篇」⑱莊子と惠子（10）について，池田は戰國末期～前漢初期の作とし，則陽篇に蘧伯玉のこととして旣出。それに基づく文章である。ただし，兩者の意味づけは異なる。本章は，孔子を外化して內化せざる人物として高く評價しているとしている。[35]

以上，內·外篇の二章については，池田は後發の作品と見なしている。しかし，實は語錄が『莊子』の原初の形態を表していると考えると，後世の思想を含んだテクニカルタームを除いた語錄の部分は，かなり古い莊子の原初的形態を含んでいるものと思われる。

一方，⑮⑯⑱の說話であるが，前章で見たように語錄の要件を含まない說話（⑮⑯⑰⑱㉓）と重複している。⑮に關しては，六家要旨や要略篇の考えと通じるものがあるにせよ，兩者ほどには細かく思想家集團は分類されておらず，當時の思想界の狀況が周知のごとく「楊·墨（楊朱と墨翟）」であり「儒·墨（儒家と墨家）」を中心とするものであったことを想定すれば，⑮の分類はさほど無理なく分類可能であり，その成立を前漢初期にまで引き下げる必要もないと思われる。また，⑯に關しては，論敵を亡くした悲しみを描いている作品を，特に後發の作品であると決めつける必要もないのである。⑱は，內·外·雜篇を通じて『莊子』は類似の說話を多く載せるが，その一例である。修辭上の語錄の要素は含まれていないようであるが，莊子の重要な槪念の一つである「化」の原型は古くから有り，說話を加え形を整えて雜篇に置いた可能性もぬぐえない。そして⑯⑰⑱の說話に關しては，修辭に乏しく語錄としての性質を見出せない。しかし，何れも話のストーリーが非常に論理的に展開している。『莊子』全體の說話を分析しなければ，輕々に結論は出せないが，「齊物論篇」が巧みに再構成されていることを考慮すれば，これら三章も或いは，語錄を說話の中に巧みに織り込んだ文章だといえるのかもしれない。

いずれにしても，語錄としての性格を備えていない說話は雜篇に集中している。たとえ意識下になかったにしても，編輯者の考えの中に，莊子の自著としては異質に映ったか，まとまりのない篇として捉えられたためなのか，內·外篇に屬さない雜篇中に置くべき章であるとの何らかの判斷が働いたものと推察される。なお，戰國末期の說話は比較的長い說話の後に思想家集團の意圖する主張を織り込んでいるのは，人口に膾炙している『韓非子』の「守株」や「矛盾」等の說

話で知られているが，物語の後に自説を展開するのは語錄（いわゆる「論說部」）といえる。そして，『韓非子』が儒家の「德治政治」にとらわれて融通がきかない人々の時代錯誤を笑っているように，『莊子』のA－B型の說話も對話型であるとは言え，恐らく物語に假託して莊子學派の主張をしようとする意圖が見え隱れしているのであり，戰國末期の說話の傾向を有しているものと思われる。

佐藤明は『莊子』の內篇について，內篇全體を通して見た場合（特に「人間世」以下の篇），相互に似たテーマの說話が續いているが，少なくともそれぞれの說話は獨立しているとはいえ，「齊物論篇」冒頭の說話は，巧みに論說と說話をつなぎ合わせているという。これは，說話としての材料があり，それらを巧みに組み合わせて『莊子』內篇を作りあげた可能性のあることを示している。さらに內篇を通讀した場合，「養生主篇」を境にして著作の態度に違いがみられる。それ以前の部分は精密だが，それ以後は單に說話を竝べただけの印象を受け，これから使用する材料をそのまま放置したようにも見えるのは，「養生主篇」を境にして編輯の態度あるいは編者が變わったと考えられるとする。[36] また，「逍遙游篇」と「齊物論篇」は，どちらも構成の仕方においては異なっているが，選擇された說話の質の高さ，編輯の巧みさにおいては共通しており，同一の狀況のもとに編輯されたと考えられる。また「養生主篇」についても，巧みに手が施されており，同一の狀況のもとで編輯されたと考える。「逍遙遊」と「齊物論」の二篇，あるいは「養生主」までを含めた部分を莊周の自著とする考えがあるのも，これらの二篇なり三篇が優れた內容のものであり，また類似性もそれらの中に見られることによると述べている。[37]

佐藤の說は正鵠を射ていると思われる。もともと『莊子』の原初的形態として語錄があり，その語錄に說話をつなぎ合わせて內篇を構成していると考えられるからである。更に，外・雜篇には語錄の性質を持つ篇は極端に少なくなり，編輯のための材料，或いはどこにも分類できないまま放置されたように見える說話が置かれている。今回は紙幅の關係上，細かい分析は出來なかったが，もちろん說話の中にも語錄と同じくらい古いものも含まれているはずである。今後は，テクニカルタームを主體とする思想史的研究に留まらず，文體や全體の構成から語錄の要素を取り除いた上で，全體の說話の構造を再認識することが重要であると認識している。

また，現行本に至るまでの過程であるが，雜然と積み上がった語錄と說話の山を，前漢末の劉向が極めて短時間に（「養生主篇」までであるが），『莊子』の作品と思しきものを，內篇に集めて編纂したと想定すれば，先に擧げた津田左右吉の「老子に類する語錄が荀子の頃にあった」とする假說は，間違いではなかったといえる。「德充符篇」は，莊周が著述したと假託する『莊子』の中の一篇としては莊周との關連が希薄であるので，佐藤のいうように，兀者や姿の醜い者を登場させ道を語らせただけであるなら，篇全體としては，主張が明確ではなくまとまりに缺ける。そこで最後に莊周の登場する說話を揭げ篇としての落ちつきを付けたものであると考えられる。それは，「逍遙遊」・「齊物論」の各篇において篇末に莊周の登場する說話を意圖的に置いていることからも伺われる。

以上のことから「德充符篇」も，もとになる文獻に一群の說話があり，ほぼそのままの形で編輯したと思われる。そして，その際全體のバランスを考慮に入れ，感覺の優れたものの手によって，比較的短い時間で編輯がなされたものと推測できる。なお「德充符」という篇名も篇全體のイメージを示していると見ることはできても，「德充符」そのものについて論理的に敍述しているわけではない。[38] 恐らく劉向は何らかの事情により編輯を途中で投げ出してしまったのであろう。特定の篇末に莊子說話（特に莊子の權威付けが有效な惠子が中心に据えられている）が置かれていたり，數話續けて登場しているのは，爾後の編輯に向けての材料に使おうと目論んでいたためであろう。そして，結果として何らかの事情で計畫を斷念するに到ったのであろうと思われる。

ま と め

本論文では，「莊子と惠子」・「莊子と弟子」といった說話を中心に見てきたが，語錄を中心とする說話が雜篇中には全く含まれないことに注視しなければならない。前章で擧げたようにその中には莊子自身や妻の死について扱ったものも含まれることから，輕々に結論を出すわけにはいかないが，編者によってさほど重要でないと思われたのか，雜篇に分類すべき特異な傾向を見出したためか分からないが，意圖的に雜篇に振り當てられたのだと考えられる。

一～三章で述べた內容に從って「莊子と惠子」・「莊子と弟子」の說話の作成を順を追って行くと次の通りである。

1　內篇の各篇名が恐らく劉向の手によって決定される（「德充符」・「大宗師」等と緯書を思わせるような命名の仕方は緯書が流行した前漢末より後漢にかけての時代と關係があると思われる）。外・雜篇には手を付けられず假稱のまま放置される。

2　內篇の「逍遙游篇」と「齊物論篇」の二篇の編纂が行われる。

3　「養生主篇」の編纂を途中で斷念する。

4　莊子―弟子・莊子―惠子といった對話形式の說話は，莊子書を權威づけるために各篇を彩る豫定で分散したが，何らかの理由で編纂を斷念し，特定の篇に束ねるような形で特定の篇に殘る。

莊子書中には，換骨奪胎した說話が諸篇に見られることから，「莊子―弟子」「莊子―惠子」といった對話形式の說話も，先に擧げたA－B型の說話として編纂し直し，「寓言篇」までの各篇の篇末に分散して置く豫定があったのかもしれない。そして，「寓言篇」より後に說話をまとめる必要のない比較的長文の劇場型の說話をまとめて置き，全體の序文のような働きをしている「列禦寇篇」を最後に付けて，そのまま何らかの事情で編集者は手を止めてしまったのではないだろうか。また，「寓言篇」や「列禦寇篇」は全體の序文や後序の役割を果たしていたとする學者もいるが，單純に說話が未整理のまま放置されている狀況を見れば，そう見えてしまうことにも一理ある。

本論文を通して，「莊子と惠子」の對話型の說話は，編輯者によって意圖的に特定の篇末に置かれ，莊子の權威付けなどに供され，重要な役割を果たしていることを發見できた。また，「莊子と弟子」の說話についても原初の『莊子』の要素を持つ語錄は含まれないものの，『莊子』の重要なテーマの一つである「死」と關係する場面で登場する等，大きな役割を果たしている。語錄を含んでいないからといって安易に新しい部分であると決めつけてはならない。

しかしながら，全體的に語錄を含まない說話が雜篇に集中して現れ，比較的長い說話（『史記』書中に莊子の篇名として見られ，篇名も內容に沿って付けられているもの）は，まとめて雜篇に入っていることから，編輯者は重要性を意識して內・外・雜篇をそれぞれ編輯していったものと思われる。いずれにしても，原初の形態を探るには，各說話から語錄を取り出してその文章を比較し，學派の發展の軌跡を探るほかない。今回は紙幅の關係上，「莊子と惠子」・「莊子と弟子」以外の對話の說話は扱えなかったが，殘りの說話を檢討し，同樣の傾向が見られるのか，引き續き考察していく必要がある。機會を俟って論じたい。

注

1）池田知久『莊子 上 全譯注』「始めに」（講談社學術文庫，2014）
2）前掲『莊子 上 全譯注』「始めに」
3）佐藤明　司馬遷の見た『莊子』（九州大學中國哲學研究會中國哲學論集10，1984）PP. 90–91
4）佐藤明　語録としての原本『莊子』（九州中國學會報24，1983）PP. 12–13
5）陸德明の『經典釋文』と外・雜篇との關係を列擧すると以下の通りである。
外篇十五篇
「駢拇」八→『經典釋文』には「擧事以名篇（事物によって名付けた篇）」とあるが，篇首の二字を篇名としている。
「馬蹄」九→同上
「胠篋」十→同上
「在宥」十一→『經典釋文』には「以義名篇（內容によって名付けた篇）」とあるが，篇首の二字を篇名としている。
「天地」十二→『經典釋文』には「擧事以名篇（事物によって名付けた篇）」とあるが，篇首の二字を篇名としている。
「天道」十三→『經典釋文』には「以義名篇（內容によって名付けた篇）」とあるが，篇首の二字を篇名としている。
「天運」十四→同上
「刻意」十五→同上
「繕性」十六→同上
「秋水」十七→『經典釋文』には「借物名篇（事物に假託して名付けた篇）」とあるが，篇首の二字を篇名としている。
「至樂」十八→『經典釋文』には「以義名篇（內容によって名付けた篇）」とあるが，篇首の近くにある二字を篇名としている（前掲『莊子 上 全譯注』P. 1145）
「達生」十九→『經典釋文』には「以義名篇（內容によって名付けた篇）」とあるが，篇首の二字を篇名としている。
「山木」二十→『經典釋文』には「擧事以名篇（事物を列擧して名付けた篇）」とあるが，篇首の「莊子行於山中，見大木枝葉盛茂。」から二字を取って篇名としている（池田知久『莊子 下 全譯注』講談社學術文庫2014，P. 175）。
「田子方」二十一→『經典釋文』には「以人名篇（人名によって名付けた篇）」とあるが，篇首の三字を篇名としている。
「知北遊」二十二→同上
雜篇十一篇
○「庚桑楚」二十三→『經典釋文』には「以人名篇（人名によって名付けた篇）」とある。
「徐无鬼」二十四→『經典釋文』には「以人名篇（人名によって名付けた篇）」とあるが，篇首の三字を篇名としている。
「則陽」二十五
「則陽」→『經典釋文』には「以人名篇（人名によって名付けた篇）」とあるが，篇首の二字を篇名としている。
「外物」二十六→『經典釋文』には「以義名篇（內容によって名付けた篇）」とあるが，篇首の二字を篇名としている。
「寓言」二十七→『經典釋文』には「以義名篇（內容によって名付けた篇）」とあるが，篇首の二字を篇名としている。
○「讓王」二十八→『經典釋文』には「以事名篇（事柄によって名付けた篇）」とある。
○「盜跖」二十九→『經典釋文』には「以人名篇（人名によって名付けた篇）」とある。
○「說劍」三十→『經典釋文』には「以事名篇（事柄によって名付けた篇）」とある。
○「漁父」三十一→『經典釋文』には「以人名篇（人名によって名付けた篇）」とある。

「列御寇」三十二→『經典釋文』には「以人名篇（人名によって名付けた篇)」とあるが，篇首の三字を篇名としている。
「天下」三十三→『經典釋文』には「以義名篇（內容によって名付けた篇)」とあるが，篇首の二字を篇名としている。
　以上のように〇を付していない殆どの篇は單純に篇首の二語ないし三語を當てられているに過ぎない。陸德明撰『經典釋文』下（上海古籍出版社1985）PP. 1407–1592

6）津田左右吉　津田左右吉全集第13卷，道家の思想とその展開（岩波書店，1964）
7）佐藤明『莊子』における非政治性の問題（大分縣立藝術文化短期大學研究紀要31，1993）P11
8）前揭『莊子』における非政治性の問題，P11
9）前揭『莊子 下 全譯注』P954
10）前揭『莊子 下 全譯注』PP. 666–667
11）前揭『莊子 下 全譯注』P663・987
12）佐藤明『莊子』齊物論篇の構造:後半の說話を中心にして（大分縣立藝術文化短期大學研究紀要30, 1992）P. 141
13）佐藤明 語録としての原本『莊子』（九州中國學會報24，1983）PP. 10–11
14）前揭　語録としての原本『莊子』PP. 12–13,『莊子』齊物論篇の構造：後半の說話を中心にして（大分縣立藝術文化短期大學研究紀要30，1992）P143
15）郭慶藩撰　新編諸子集成『莊子集釋』（中華書局，1961）
16）佐藤明『莊子』の說話の一側面—逍遙遊篇の惠子・莊子問答を中心にして（九州中國學會報27，1989）
17）福永光司・興膳宏『莊子』內篇（ちくま學藝文庫 筑摩書房，2013）P32
18）前揭『莊子』內篇 PP. 35–36
19）前揭『莊子』內篇 P194
20）前揭『莊子』の說話の一側面—逍遙遊篇の惠子・莊子問答を中心にして，P9
21）前揭『莊子』外篇　PP. 442–443
22）福永光司・興膳宏『莊子』外篇（ちくま學藝文庫 筑摩書房，2013）P366
23）前揭『莊子』外篇　PP. 442–443
24）前揭『莊子 下 全譯注』P176
25）前揭『莊子』外篇　P483
26）前揭『莊子 下 全譯注』P177
27）前揭『莊子 下 全譯注』P482
28）前揭『莊子 下 全譯注』P482
29）前揭『莊子 下 全譯注』P176
30）前揭『莊子 上 全譯注』P383
31）前揭『莊子 下 全譯注』P149
32）佐藤明　莊周說話に見える戲曲的性格（九州大學中國哲學研究會 中國哲學論集22，1996）PP. 4–5
33）前揭『莊子 下 全譯注』下P482
34）前揭『莊子 下 全譯注』下P482
35）前揭『莊子 下 全譯注』下PP. 666–667
36）「司馬遷の見た『莊子』」，P90
37）前揭『莊子』齊物論篇の構造—後半の說話を中心にして，P143
38）佐藤明『莊子』人間世篇以下四篇の構成について，（大分縣立藝術文化短期大學研究紀要32，1994）P27

参考文献

赤塚忠（1974）『全釋漢文大系16莊子上』集英社
赤塚忠（1980）『全釋漢文大系17莊子下』集英社
池田知久（1983）『莊子上』學習研究社
池田知久（1986）『莊子下』學習研究社

王先謙（1974）『莊子集解』臺灣・三民書局印行
郭慶藩 撰（1961）『新編諸子集成　莊子集釋』中國北京・中華書局
周啓成 校注（1997）『莊子虞齋口義校注』中國北京・中華書局
服部宇之吉 校訂（1911）『莊子翼』富山房
福永光司（1966）『中國古典選7莊子 內篇』朝日新聞社
福永光司（1966）『中國古典選8莊子 外篇』朝日新聞社
福永光司（1967）『中國古典選9莊子外篇 雜篇』朝日新聞社
方勇 撰（2012）『莊子纂要』中國北京・學苑出版社
牧野謙次郎（1914）『漢籍國字解全書 莊子上』早稲田大學出版部
牧野謙次郎（1914）『漢籍國字解全書 莊子下』早稲田大學出版部